

(1) 特筆すべき教育活動の取組と成果（大学教育改革の支援プログラム（GP等）の採択状況と取組、グローバルCOE等の大型プロジェクトの採択・実施状況などを含む。）

独自の学生定員とカリキュラムを有する部局ではないので、「特色ある教育GP」等を申請する条件にない。

(歴史資料保全)

本センター「歴史資料保全のための地域連携」研究ユニットでは、東日本大震災における被災歴史資料の保全活動において、津波で被災した文書資料などの応急処置を、東北大学も含む仙台地区の大学生および大学院生の協力を得て実施している。

参加した学生は、ユニットで蓄積してきたノウハウを基にした古文書資料の保全方法、さらには歴史学・歴史資料保全学という専門性を生かした地域復興の意義について学ぶ機会となっている。

(ロシア人学生を対象とする日本学講習会)

2010年度訪問講座「日本とアジア」の開催（10月7日-8日）

ノボシビルスク国立大学東洋学部との取り決めに基づき、第2回目の訪問講座を実施した。対象は同大東洋学部の日本語専攻の学生など合計60名余が出席した。講師は、本学大学院文学研究科阿子島馨教授、本学東北アジア研究センター高倉浩樹准教授の2名である。学生との交流は、日本語学専攻の学生と考古学専攻の学生と2度行った。

(映像民族誌制作のための実践ビデオ講習会)

高倉准教授は2011年2月17日から18日にかけて、文化人類学やその隣接分野でのフィールドワークに必要な映像記録（ビデオ）の撮影・編集に関する理論と実践について、東北アジア研究センター客員研究支援者齋藤秀一氏を講師に招き大学院学生を対象に講習会を行った。

(アウトリーチ)

仙台市教育委員会と東北大学が協力して実施する仙台市内中学校での「東北大学出前授業」を佐藤教授が実施し、高校生を対象とする出前授業（新潟県柏崎翔洋中等教育学校）、夢ナビライブ（東京ビッグサイト）など東北大学の活動を紹介する催しに佐藤教授が出講した。

また東北大学リベラルアーツサロンにおいて2月に上野准教授、7月に高倉准教授が講師を務めた。

(2) 特筆すべき研究・診療活動の取組と成果

センターが制度化している時限的な研究組織である研究プロジェクトユニットからは、社会が要求する最新のテーマに関する研究成果があげられている。

(歴史資料保全のための地域連携研究ユニット)

本ユニットでは、東日本大震災で被災した原資料の応急処置を進めている。活動では奈良文化財研究所や東北芸術工科大学文化財保存センターの支援を得ながら、被災した歴史資料の現場での応急処置と専門機関での修覆を連携させた対応方法の構築に努めている。あわせて、津波により原史料が失われ、デジタルデータが現存唯一の記録となった古文書などの史料について、恒久的な保存体制の構築についても検討を進めている。

(リモートセンシング研究ユニット)

本ユニットでは震災関連の研究活動として、衛星、航空機搭載の合成開口レーダ (SAR) で行った東日本大震災被災状況把握のための緊急取得データの解析、地滑り検知用レーダシステムの開発、地中レーダによる緊急遺跡調査、震災被害の把握などを実施した。

(東アジアにおける移民の比較研究ユニット)

移民のコンタクト・ゾーンに関する比較研究を推進することを目指す本研究では、世界各地の事例を題材とした研究会と、日本の外国人妻の暮らしと活動をテーマとするワークショップの実施により、グローバル化の進む日本社会での多文化共生の実現のための具体的実践や施策のあり方を模索した。

(シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット)

このユニットでは、地球温暖化がシベリアの地域社会にもたらす影響分析を、文理連携のアプローチですすめているが、その中間成果として、高倉浩樹編『極寒のシベリアに生きる』(新泉社)としてまとめ2011年末までに刊行予定である。人類学・言語学・神話学に加え、動物保全学、水文学、土木計画学などの理系分野をいれた我が国最初のシベリア地域研究入門でもある。

(21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット)

本ユニットでは、島根県立大学北東アジア地域研究センター、富山大学極東地域研究センターと学术交流協定を締結し、科学研究費補助金の申請を行い、平成23年度から採択されている。また東北アジア研究者の基礎情報を集めてデータベース作成を進めている。

(東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット)

本年度は、モンゴル国、中国、日本の研究者による国際学術会議を2回開催して、国際的な研究者の連携拠点を形成する取り組みを行った。会議の成果は予稿集として製本・配布し、ホームページで公開して研究のハブ拠点形成をめざしている。

(東アジア出版文化研究ユニット)

本ユニットでは、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業による拠点形成を承け東アジア出版文化をめぐる教育・研究体制を維持し、国際共同研究の形で共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」を実施し、研究蓄積の乏しい15~16世紀前後の封建体制の転換期における東アジア諸国の出版文化の研究を進めている。また、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」と共同で学界に東北アジアの貴重文献を刊行して提供している。このほか、日中韓三国の研究者が一体となって国内国外若手研究者の育成に努めている。本年9月1日に『旅行く孫悟空』(磯部彰著、塙書房)を出した。

(森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット)

本研究ユニットは人為起源の大規模森林火災を制御することにより発生する二酸化炭素の削減を図る目的で、今年度から3年間の予定でスタートした。主な課題は(1)火災の出火から1時間以内に消火活動を行うための技術開発、(2)森林火災から発生する二酸化炭素量の測定方法の開発、(3)森林火災から発生する二酸化炭素排出量取引構想の開発、(4)ロシアをケーススタディとするスキームの開発、(5)研究過程で得られる衛星データ解析の応用研究等であり、各課題の洗い出し作業に着手している。

(ロシア遊牧民研究)

高倉准教授はフィールドワークに基づくシベリアの少数民族サハ人の牛馬牧畜に関する民族誌的調査を1999年以来行ってきたが、その成果を高倉浩樹著『極北の牧畜民サハ：進化とマイクロ適応の民族誌』(昭和堂)としてまとめ、2011年末までに刊行予定である。

(3) 特筆すべき社会貢献、国際化等の活動の取組と成果**(情報発信)**

研究成果の出版活動に加え、東北アジア学術交流講話会との連携強化による公開講演会などを通じた研究成果の外部への発信を活性化させている。

(文化財保護活動)

「歴史資料保全のための地域連携」研究ユニットでは、東日本大震災で被災した歴史資料の保全活動を進めている。震災以前に協力関係にあった自治体や地域の歴史サークルなどから 533 件（2011 年 8 月 30 日現在）の被災状況を収集した。さらに、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク協同で 67 回の被災地調査（同前）と 34 件の被災資料レスキューを行い、被災した歴史資料を仙台などの安全な場所に一時待避させた。

これらの資料は、全国の文化財保存の関係機関やボランティアの支援を得ながら、目下応急処置を進めている。処置が終わった史料については、順次デジタルカメラによる記録化を進めている。

(モンゴル歴史研究)

モンゴル科学アカデミー及び中国内モン古師範大学蒙古学学院との協定に基づき、モンゴル国ウランバートルで国際会議「モンゴル史研究と史料」（2009 年度）を開催し、その報告論文集（2010 年度）を刊行した。会議開催と論集刊行にあたっては、モンゴル科学アカデミー歴史研究所清代史研究部門の協力を得たが、この研究部門は、東北大学を訪問したアカデミー総裁 B. チャドラー博士の提案で設置され、東北大学を卒業した研究者をチーフに任命した。同部門の研究者は 4 名から成るが、2 名が本学に留学経験をもち、別の 1 名は日本学術振興会の RONPAKU プログラムにより、本センター教員が指導にあたっている。

(シベリア人類学研究)

高倉准教授は、シベリア民族学促進に関わるドイツの学術組織「Kulturstiftung Siberien」において、民族誌出版を促進するための企画「Studies in Social and Cultural Anthropology」での国際編集委員会における編集委員を 2011 年より務めている。

(人道的地雷除去活動)

カンボジアにおける地雷除去活動は 3 年目になる。従来はすべての資金を東北大学が提供していたが、本年より東北大学が開発したセンサをカンボジア政府に貸与し、地雷除去作業自体はカンボジア政府資金で行われる体制に移行した。より本格的な現地展開と言える。一連の活動で既に地雷 80 個以上を除去している。

(4) その他、特筆すべき活動等の取組と成果

(公募型査読学術雑誌の構築)

東北アジア研究センターの紀要的位置づけであった雑誌『東北アジア研究』を、2011年度より東北アジア地域研究を牽引するための査読制学術雑誌へと変更し、国内外からの公募をうけつける体制を整えた。これにともない学外の関連研究者とセンター内研究者からなる編集委員会を設けた。その結果、国内外から多数の原稿が集まった。現在査読中であり、最終的な採択数は未定だが、当センターが東北アジア研究を国際的にも先導する体制を整えつつあるといえる。

(「東北アジア研究専書」シリーズの創刊)

東北アジア研究に関わる市販の学術専門書を出版するために、「東北アジア研究専書」というシリーズを設け、出版助成する体制を整えた。2011年度中に2冊の刊行をめざしている。2冊ともすでに校正段階にはいっており、年度内の刊行は着実に進んでいる。本事業は東北大学出版会との連携による。